

第4回不漁問題に関する検討会 (議事要旨)

○日 時：令和3年6月4日(金) 10:00~11:30

○場 所：農林水産省第3特別会議室(web併用)

○出席委員：大森委員、小林委員、竹葉委員、田中委員、中田委員、宮原委員、山内委員、山崎委員、婁委員、和田委員

●出席者からの主な意見は以下のとおり。

1. とりまとめ案について

<総論>

・意見なし

<①リスクの把握>

- ・現場との認識の共有が重要であり、また、使えるデータをどのように作っていくかということについても研究者・行政と一緒に考えていくことが重要。例えば、今回の不漁問題のような事柄については、事業を超えて長年蓄積されたデータを活用できるようにしていただけると良い。
- ・沿岸のいか釣り漁業者によれば、5月の段階ではスルメイカが好調であるとのこと。昨年秋に親が帰ってきて、産卵期の温度変化が示されている中でも発生が良かったのではないかと。こういう部分で、研究者等が現場を見て調査して資源評価に反映してほしいということである。現場でのデータ収集など漁業者との感覚がずれないように考えてほしい。

<②専門的な漁業からマルチな漁業への転換>

・意見なし

<③沿岸漁業の取組方向>

・意見なし

<④サケに関するふ化放流と漁業構造の合理化>

- ・「野生魚」の文言が「早急に」という形で盛り込まれ満足している。新聞にも出ていたが、北海道の道南でニジマス養殖が、上手くいきかけている。利用可能な施設はそのような方向に向かうべきだと思っている。

<⑤加工流通業の取組方向について>

- ・未利用資源は、国内だと使ってないことがもったいないという印象になるが、資源状況が分からないものや小型魚が多いケースもある。未利用資源を扱うレストランなどから持続可能性のチェックをしてほしいと頼まれることがあるが、できるのは、小型魚・稚魚ではないことと絶滅危惧種ではないことの2つだけ。未利用資源の実態把握についても研究機関が重要になってくる。
- ・東京のシェフが参加する水産資源の持続的利用に関する会議で、色々対策を取ってくれているが水産庁や漁業者で行っていて自分たちの危機感が伝わっていないの

ではないかという意見もあった。そういうところも考えていかないといけない。

<⑥地球温暖化等の環境問題への対応について>

- ・ 報告書案については問題ない。漁業者と話す機会があり、資源管理のため漁獲量を減らすなら船を作り替えて効率よくするしかないがどんなやり方があるかと相談があった。自分からはもうかる漁業創設支援事業があることを説明し、今後は効率だけでなく電化や水素化も考えていかなければならないことを伝えたところ、取り組める部分があれば取り組んでいきたいとのことだった。直ちにできるものではないが、こうしたやる気のある漁業者を誘導する施策として、もうかる事業も、検討してほしい。
- ・ 現実的に水素化はすぐにはできない。油圧系の機械、冷凍機、補機の使い方など、油が無限にあるという発想の今までのシステムではなく、それぞれチェック項目・リスト化して、陸電の利用などシステム自体について化石燃料を使わないようなものを考える必要がある。
- ・ 洋上風力は、報告書案にあるようなことを水産分野からも発信していくことが重要。
- ・ 洋上風力の漁業影響調査は非常に大事。実際に進めていく上では、社会影響調査も含んでやれるといい。

<⑦その他の関連事項>

- ・ 第一種水産動植物であるナマコ、アワビ、シラスウナギの3魚種が実際にまだ動き出しておらず、これら3魚種で実効性が担保されることを見極めなければいけない。輸入品は第二種水産動植物であり、違法に採捕されたものの流入防止は大切だが、法律で指定・運用をしていくことはそう簡単ではない。現実にはきちんと手順を踏まないといけない。
- ・ 人材確保に係る水産高校への働きかけについては現行水産基本計画にも位置付けられ、漁業に入ってくる者が増えてきており良い傾向にある。海技士の確保については船舶職員の乗組み基準が業界としては本当に厳しい。なかなか風穴が開けられないが、次の基本計画の中でこれを位置付けることをお願いしたい。
- ・ いま海洋保護区の話が広がってきており、温暖化を止めるためにできるだけ広いエリアを設定すべきだということを色々な方面から言われるかもしれない。水産庁でも研究して対応を考えてほしい。
- ・ 海洋保護区と関連して、藻場・干潟などどういうところでブルーカーボンの機能を保持・保護していくのかについて、しっかり紐付けて議論をしていくべきだと思う。

以上の議論を踏まえて、とりまとめ案について全委員の合意を得た。

2. 委員からのコメント

- ・我々の総意をまとめていただき感謝。このとりまとめをどう施策に活かしていくのか、水産庁や水研機構に願います。
- ・カーボンニュートラルなどへの対応は各省庁がすでに様々な検討会を立ち上げて議論している。漁業は船の建造など他省庁にまたがる対策も必要となるので水産庁でも検討チームを作るなど負けないように対応してほしい。
- ・検討会の資料は、資源状況、変動要因等分かりやすくよかった。やはり分析にデータが揃っていることが重要であり、研究機関で人と予算を確保できるよう取り組んでいただきたい。加工については環境に対応した弾力的な産業になることと取りまとめられた。自然相手で魚種変化が避けられず、市場の変化、人手不足の中で、こういった変化に対応し新たに投資をしていく加工業者をしっかりと支援していただきたい。そうすれば地域にも新たな風が吹いてくるのではないか。地域の零細な加工業者は、国産原料・前浜原料を使って多種多様な製品を作り、地域に貢献しており、そういったことを念頭に置いて施策を展開していただきたい。
- ・水産資源には3つ特色があり、1番目は持続的に利用できること、2番目は変動があること、最後が無主物であること。1番目と3番目は色々対策があるが、2番目は、工業製品と違い計画的に作れないといった面がある。それに対応しないといけないが、一方イワシやサバの様に大変動するものについて、豊漁時に合わせてインフラを整備すると無駄になる。産業の適量規模・持続できる規模がどれくらいか、計算したところイワシでは豊漁時100万トンぐらいで考えるのがいい。研究者サイドの視点として、温暖化はなかなか予想できないが、シナリオ方式なら変化するものもある程度計算できると思う。適量規模を考慮しマルチな漁業を行う時にどのような効果があるのか、将来的にはそのような計算もできるようになるといいと考えている。
- ・検討会での議論は、今後の研究の方向性を考えていく上で重要なことだと思っている。データ集めと共有を一生懸命やろうと思っているので、行政・業界との場を作っていくことが非常に重要と思っている。
- ・短い期間だったが大変貴重な機会をいただいて感謝。次世代・未来志向で物事を捉えることは非常に大切。今回の方向性が、将来の世代が評価した時に良い方向性だったと言ってもらえるようなものになるといい。水産資源の問題は、漁業関係者だけでなく、それを利用する消費者まで大きな関心事である。どうやって管理されて我々の食卓に届くのか、透明性のある管理や方針が期待されている。
- ・ふ化放流事業の遺伝的な影響が盛り込まれた。是非、早急に進めていただきたい。マルチ漁業の転換について、北海道ではイワシ棒受網操業を一生懸命やっている最中である。知事許可漁業と大臣許可漁業とのすみ分けがあるが、北海道の事例は水産庁が中に入って一生懸命取り組んで、まき網の方の理解を得て行われている。今後も漁業調整を一緒になってやっていかないとできない。よろしく願いたい。
- ・2点コメントしたい。1点目は持続性。漁業の持続性は3つのポイントで考えられ、資源の持続性、経営の持続性、地域社会の持続性がある。今回の対応の方向性は非常にバランスがよい。水産基本計画等を通じて実際に現場におろしていく場合には、バランスの問題等の視点も重要となる。2点目は消費の視点で、今回はマーケットや消費者の問題についてあまり議論されなかったが、中長期的な対策を考えていく上では消費者の理解がないといけないと思うので、是非そうした視点も大切にして

ほしい。

- ・ 将来に向かって2点ほどコメントしたい。1点目はモニタリングの重要性。この検討会でも議論になったが、非常に変化が大きくなっているののでしっかりモニタリングをしていくしかない。このモニタリングを、現場の漁業者と一緒に情報を共有しながらやっていくことが重要。研究サイドからは水研機構に期待するところが大きい。変化の背景の分析や可能な範囲での予測をしっかりやって、それを現場と共有しながら対策を進めて行くことが大切。2点目は、漁業の構造改革をこれから進めていく、その中で脱炭素化を進めていくことが非常に大事になってくる。そのため様々な技術開発が行われると思うが、開発された技術を現場に実装するにあたり、制度面・財政面でのサポートがないと、疲弊している現場の漁業者はなかなか導入できないところがあると思う。今後の施策の中で検討いただきたい。
- ・ 皆さんが発言される良い会議だった。特にこういう新しい、今までの経験値が使えない問題に対してどうやって対策を取るかということについては、率直な意見交換が必要になる。また何かの機会があればやっていただきたいし、今後の進捗についてもフォローして行っていただきたい。

以 上